

「健康で心豊かに長生きをしましょう。」(48)

平成 28 年 9 月 29 日

村山 章

「死」をどう受け入れるかは、大変難しい問題です。私たちにとって「死」は最大恐怖です。もしも銃口を向けられたら怯えることと思います。誰もいつかは「死」という最大恐怖を受け入れなければいけないときが訪れますが、逆に、毎日耐え難い痛み、苦しみに苦しみ、早く死にたいと医師に安楽死を求めても、法律上はそのような医療行為は認められていません。

「日本尊厳死協会」は、治る見込みのない病態に陥って死が迫ったときに、ただ単に死期を延ばすための延命治療を断る「尊厳死の宣言書」(リビング・ウイル)を発行し、管理しているそうです。人工呼吸器や人工透析、胃ろうなどの栄養・水分補給によって、病状回復が期待できないまま生かされるのではなく、安らかに自然な「死」を迎えるためのものだそうです。そして苦痛を和らげるための措置である緩和医療は十分に実施してほしいという要望も記されているようです。会費など多少のお金はかかるようですが、ぜひ登録したいものです。

人類の歴史では、死ぬまで働くのが当たり前の考え方でした。第一次産業の農林水産業で働く皆さんは、今でもそうなのではないでしょうか。第二次産業が工業化することにより、人々は工場において決められた時間のなかで勤務をし、年を取って定年を迎えると退職し、働くことをそこで止める人もいます。そして、定年退職後の人生をどう過ごすかがありがたい悩みとなりました。さらに情報化社会となることで、モノと情報が溢れてしまい、ストレスなしで生活できない社会となりました。そんな環境のもとで心身共にラクな方向を求め、脳が満足する美味しいものをたくさん食べて生きていると簡単に病気になります。ただし、日々進化を遂げている現代医療はなかなか簡単には死なせてくれませんね。一日一日を大切に、謙虚に、笑顔で精一杯努力をして生きる。それが亡くなる直前まで元気に活動する“ピンピンコロリ”につながるのではないのでしょうか。